

# TUMSAT-OACIS Repository - Tokyo

University of Marine Science and Technology

(東京海洋大学)

## 教えることの辛さと反省

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-12-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 堀籠, 教夫 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://oacis.repo.nii.ac.jp/records/363">https://oacis.repo.nii.ac.jp/records/363</a>

[随想]

## 教えることの辛さと反省

堀籠 教夫

### Painfulness and Reflection of Teaching

Michio HORIGOME

昭和40年代の中頃から正式の講義を持つようになったが、その時、最初に苦労したのは、教える内容もさることながら、講義をどのようにすればよいか、具体的によく分からなかった。もちろん、その当時まで生徒や学生として幾多の授業などを受けてきたが、それと実際に学生に教える立場になることは全く別物であるとすぐ悟った。しかし、悟ったからと言って、講義の仕方が分かるわけではない。そこで、その当時まで受けてきた授業や講義を振り返って、それらの中から取捨選択し、それに自分の考えも取り入れて講義を行うことにした。つまり、具体的には出来るだけノートや教科書を見ないで講義することである。その理由は、ある大学のF先生やM先生の講義ではチョーク以外、教科書も何も持って来ないという徹底ぶりであったし、その講義のうまさに一方ならず感銘を受けたからである。更に、このやり方を採用したのにはもう1つの理由があった。昭和40年代頃、「リサイタル」と言う名目で、歌手がヒット曲を中心にした音楽会が盛んに開かれた。今では「リサイタル」という言葉も聞かなくなつたが、なんとなくなつかしい。ある時、懇親会である人から「お前も大学で講義してるんだろう。だったら、講義中ノートを逐一黒板に写すようなことはするな。恥ずかしくないか。今日、ぽっと出の若い歌手でさえリサイタルで2時間程度何も見ずに歌うのに、どうして大学の先生は2時間足らずの講義をノートを見ないで出来ないのだろう」という質問に残念ながら反論出来なかった。そして、学校にいる間、始終この言葉に悩まされることになった。まだ若いうに現実のこわさやつらさを知らないこともあり、勇猛果敢にその方針を実行した。

ところが、講義中に資料等を見ないようにするだけで、緊張感は高まり精神的に余裕がない状態に追い込まれた。ど忘れや物忘れは言うまでもなく、何かの拍子にパッと忘れて次が出て来ない、どうしてこうなるか急に分からなくなることがあった。あとで考えると、これが数式の符号であったり、計算の途中で間違えたり、論理のくいちがいなどの比較的小さなミスと分かり残念な思いを随分繰り返した。また、講義前日の準備には予想以上に時間がかかり、精神的負担も大きくなるなど、当初経験不足もあり思い通りに講義はなかなか進まなかった。それでも当初の目標を守り続けたため、だんだん苦しくなっていたが、それでもノートに頼らない講義にかじりついていて、そして、どうしたらよいかいろいろ考えたが特別名案はなく、その結果分かったことは単にきちんと講義用ノートを作成するという当たり前なことに行き着いただけであった。思うように進まないで悩まされた講義も慣れるに従って少しづつ進むようになったが、学生との兼ね合いもあり、講義がうまく出来たと思えることは殆どなかった。そして、とうとう最後まで会心の講義と言うものを殆ど経験しないで終わったが、このことが今でも慙愧に耐えない。

それでも講義を始めて2,3年ごろまでは、担任科目数が少なかったから努力すれば何とか耐えられたが、3,4科目以上になると苦労は増すばかりで、どうしてよいものやら途方にくれるようなこともしばしばあった。講義はどちらかといえば、理論的内容に重点をおき、出来るだけ内容を易しく理解できるように丁寧に板書とした。だから学生からの文句も多かった。学生から必ずと言っていいほど、「なぜ教科書を使わないか」と聞かれた。次に「講義が早すぎるからノートが取れない」、「ノートをすぐ使い果たす」とか、「同じような式が一杯書いてあるから省略したらどうか」と言う注文はいつまでも続いた。しかし、これらは講義の内容やスピードとも関連があり、あまり考慮した記憶はないが、今頃になって、もう少しペース配分を考慮すべきだったと反省している。現在のように詳細なシラバスや講義内容を前もって学生に周知させることなどのないのんびりした時代だったこともあり、比較的自由に講義できたことは幸せだったと思っている。しかし、今から考えると、授業科目の目的や明確な見通しもない講義を通して勉学に励んだ当時の学生にとっては受難の時代であったかもしれない。

次に期末試験を初めとする試験類などでは、いろんな工夫をしながら試験問題や試験条件などを学生と紳士協定を結んで実施した。例えば、試験中のカンニングをチェックするのが嫌なこともあり、自分のノート、資料など参考図書を持ち込みを可としたこと、つまり何を見てもよいこと、記憶で出来る問題は極力少なくし理解度を試す内容に徹して出題したこと、講義への出欠は試験結果に関係ないなど、いま思うと少し大胆過ぎたやり方だったかもしれない。その分、解答用紙の採点

には苦勞したが、たまに講義内容よりも優れた解答に出会うとうれしかった。しかし、それ以上に強い印象として残っていることは試験後の学生からの質問であった。「なぜあの学生より自分は成績が悪いのか」、「あの学生は出席率も悪いのに私より良い成績になっているがその理由は」、「答案用紙に解答を書いたのに合格しないのはどうしてか」などという質問をよく受けたが、今思い出しても身が引き締まる。大体、学生が何か質問に来る場合は、よく数人で研究室に押しかけてきたので一層緊張した。そのたびに、答案用紙を持ち出しては、解答の間違いから理解すべきところなどまで説明した。自分では丁寧だと思っても、学生にとって分かり易かったかどうかは今では分からない。それから、よんどころない事情で試験に欠席せざるを得ない学生に対する試験後の対策にも気を使った。特に、一度で再試験に通る学生は少ないため、再試験の問題が全部解けるまで対応したり、出来るだけ合格できるように配慮したために成績締切期日までに提出できず、教務課から督促をよく受けた。期末試験や再試験などで何回も顔を突き合わせた学生が今では懐かしい。

昭和 50 年代後半になると、非常勤講師を頼まれて他大学にも出掛けたが、それはそれで得難い経験をした。そう言えば、ある短大のそれも夜間コースの学生を相手にする講義を引き受けたことがある。学生は社会人から主婦までの人達の集まりであり、特に女性が多いなど今まで経験したことのない珍しい出来事があった。開講直後では、学生が受講科目を決めるためどっと教室に入りきれないぐらい押しかけて来たが、これには驚いた。2,3 週間もすると、教室はゆったり座れる程度の人数となり、そしてじっと黙って講義を聴いているので、特に質問もないので皆分かっていると思い安心していたら、まったくその逆であった。ある時、受講生の代表が「先生は確かに日本語を話しているようだが、その言葉が何を意味するのか全然で理解できないので、質問も出来なかった」という言葉にはさすがに参った。大体、受講者の基礎的知識を期待していたのがいけなかった。それ以降もトラブルは発生したが、無事前学期終了まで漕ぎつけた。そして、夏休み明けにレポートを提出するように学生に言ったら、これまた大騒ぎとなった。だから、ほとんどの学生はレポートを提出しないだろうと思っていたら、選択した大部分の学生が提出したのには本当に驚いた。受講者の半分以上が昼間働いているため、時間的にも身体的にも決して楽な状況になかったにもかかわらず、きちんと書かれた答案レポートには別の意味で深い感銘を受けたし、今でも忘れられない。

一方、その当時は社会が景気がよく右肩上がりのころであり、多くの企業や機関で信頼性のセミナーが頻繁に開催された時代でもあった。そして、今でも企業戦士の誉れ高い社会人相手の講義などから受けた印象が鮮やかである。彼らは講義を受ける心構えや態度が学生とまったく違っていた。つまり、身銭を切って講義を受け、体得した結果を自分の会社や仕事に何が何でも生かそうという人達の集まりであった。しかも、会社のセミナーは課題や問題の処理や出来るだけ短期間に実力を付けさせるように配慮していたこともあり、講義を受ける態度から質問の仕方まで彼らの迫力や気力は大変なものだった。多いときには一日に百数十名の受講者を相手にする場合もあり、その疲れもまた異常であり大学の講義とは似て非なるものであった。

現役を離れたいま、落ち着いて振り返ると、手許に約三十年にわたる講義用に作成したノートが残ったが、その多さに驚いた。毎年、科目ごとに新しいノートを作成して講義していたことから見れば当たり前だが、今まですっかり忘れていた。それらの古いノート等を見ると、やはり当時の状況が思い出されて苦しいような懐かしいような気持がする。いま読んで、あまりにも雑然と記述してあり、これでよくもまあ授業が出来たものだと思える。しかし、よく見れば、分かっているところは略記し、難解な箇所は比較的詳細に記述してあり、そのようなところが年によって変化しているが、今ではどんな理由で変えたかよく思い出せない。これらのノートを用いてどのような講義を実際に行っていたか、当時の学生に聞いてみたい気もするが、同時に聞きたくない気持も心のどこかにある。

時代と共に教育環境などの変化にもかかわらず、ノート等に頼らない講義を出来るだけ踏襲してきたが、多くの面で有利なこともあったけれども、つらい思いも存分に味わった。後年になって前述の M 先生にお会いする機会があり「当時の先生の講義はすばらしいものでしたが、準備は如何でしたか」と質問したら、「準備に時間はかかり実は大変だった」と言う話にとっても安堵した記憶がある。今でも、講義中についしどろもどろな状態になっている夢を見るなど、教えることについての忸怩たる思いはなかなか消えそうにない。